

# 殺し屋たちのプロフィール

—池波正太郎『仕掛人・藤枝梅安』—

安藤勝志

## はじめに

法治国家においては犯罪というものは社会正義に反する違法行為である。それはいかなる理由があつたとしても許される行為ではない。当然、犯罪者には法的制裁や社会的制裁が加えられる。しかし、弱者である民衆が被害者とならざるをえないような罪を犯しながら、その権力や金力を背景として巧みに法の網を潜り抜ける犯罪者もいる。その許しがたい犯罪者に対する民衆の怒りや悲しみは心の底に澱のように残る。ことに被害者や家族の無念の思いは容易に癒されるものではない。その被害者や家族が加害者に私的制裁を加えたいという思いも理解できる。しかし、現実社会での私的制裁も違法行為である。それもまた許される行為ではない。それは仮想空間の中しか存在を許されない行為である。小説という仮想空間に限られるものではあるが、その満たされぬ思いに応える作品がある。それが池波正太郎（一九三二—一九九〇）の時代小説『仕掛人・藤枝梅安』である。

時代小説『仕掛人・藤枝梅安』は昭和四十七年（一九七二）から平成二年（一九九〇）にかけて『小説現代』に掲載された連作時代小説である。同誌には「おんなごろし」（昭和四十七年三月号）、「殺しの四人」（昭和四十七年六月号）、「秋風二人旅」（昭和四十七年十月号）、「後は知らない」（昭和四十七年十二月号）、「梅安晦日蕎麦」（昭和四十八年二月号）、「春雪仕掛針」

昭和四十八年六月号）、「梅安蟻地獄」（昭和四十八年九月号—昭和四十八年十月号）、「梅安初時雨」（昭和四十九年二月号）、「闇の大川橋」（昭和四十九年四月号—昭和四十九年五月号）、「梅安鯉飯」（昭和四十九年八月号）、「殺気」（昭和四十九年十一月号）、「梅安流れ星」（昭和五十年二月号）、「梅安最合傘」（昭和五十年六月号）、「梅安迷い箸」（昭和五十一年二月号）、「さみだれ梅安」（昭和五十二年八月号）、「梅安針供養」（昭和五十四年二月号—昭和五十四年七月号）、「梅安雨隠れ」（昭和五十六年一月号）、「梅安乱れ雲」（昭和五十七年四月号—昭和五十八年二月号）、「梅安影法師」（昭和六十一年十二月号—昭和六十二年五月号）、「梅安冬時雨」（平成一年十二月号—平成二年四月号）の全二十編の作品が断続的に発表されている。「梅安針供養」、「梅安乱れ雲」、「梅安影法師」、「梅安冬時雨」の四編は長編であるが、他の作品は短編である。ただし、「梅安冬時雨」は未完の作品である。

『仕掛人・藤枝梅安』シリーズは、『鬼平犯科帳』シリーズ、『剣客商売』シリーズと並ぶ池波の代表作である。池波は『鬼平犯科帳』では長谷川平蔵という体制側のリーダーを描いており、『剣客商売』では秋山小平衛というフリーランスの剣客を描いているが、『仕掛人・藤枝梅安』ではアウトローの殺し屋を描いている。

殺し屋を意味する「仕掛人」なる用語は作者の新造語である。もともと「仕掛け」なる語は①やり方。②行動に出ること。③用意。④装置。⑤詐欺などの企み。⑥途中まですること。⑦遊里で、うちかけをいう。

また、小袖をいうこともある」（岩波書店「広辞苑」）などの意味で日常的に使用された語であり、殺人の語意は存在しなかった。その複合語にも「仕掛け事」や「仕掛小道具」、「仕掛火花」などの語は存在したが、「仕掛人」なる語は存在しなかった。まして「仕掛人」なる職業は歴史的には実在しない。もちろん、殺人の依頼者を意味する「起り」、その仲介者を意味する「蔓」も同様である。これらは日常語に特異な意味を持たせた造語である。それらの用語にはすでに作者の仕掛けがある。読者に親近感を抱かせる仕掛け、読者をなまなましい現実の世界と隔絶させ、時空を超えた仮構の世界である江戸の暗黒街の闇、その世界に誘うための仕掛けである。

ここでは作中に登場する「仕掛人」たちの人物形象を分析し、作者池波正太郎の作品への仕掛けを読み解きたい。

### （一）藤枝梅安の場合

仕掛人シリーズの作品群の中に登場する仕掛人の典型的な人物像は藤枝梅安である。「これは気に入っているのですよ。自分でもうまくついたなあ」と、感じがね。見たとこ、ああいうごつい感じの男ですからね。姓の方は静岡県の藤枝で、これは東海道のごくかで生まれたことにしようと思つて、五十三次のあれを見ているうちに……藤枝、あ、いいなあと思つて……梅安っていうのは、ちょっと色気あるでしょ」（藤枝梅安の十年<sup>①</sup>）と常磐新平との対談の中でも述べており、作者の思い入れも強い登場人物である。作中の梅安は「おんなごろし」<sup>②</sup>には「この寛政十一年で三十五歳」とあり、「梅安乱れ雲」には「四十を越えてから」とあり、表では江戸の雉子の宮近くで鍼医を開業しながら、裏では仕掛人として生きる壮年期の人物として描かれている。人の命を救うた

めの鍼医が正業であり、それに生き甲斐も感じている。人の命を絶つ殺し屋である仕掛人は正業ではないが、ストーリーの展開とともに仕掛人として生きる比率が高くなっている。

生まれながらの殺し屋はいない。殺し屋にはそうならざるをえない動機がある。仕掛人梅安もまた同じである。梅安には仕掛人の道を歩まざるをえなかった動機がある。梅安にはその動機となった暗い宿命の過去があった。

駿河国藤枝宿の桶屋治平の子として生まれた梅安であったが、家庭の幸福には恵まれなかった。「親父が死んだとき、おふくろはね、死骸しがいに取りついて、わあわあ、わあわあ、まるで洪水でみずのように涙をながして悲しんでいやがったが……ふん、その翌朝。けろりとして間男と手に手とり、藤枝から逃げてしまったのさ。おれをひとりぼっちに置き去りにしてな。うむ……うむ、妹だけは、それでもつれて出て行きゃあがった」（「おんなごろし」）と同業の仕掛人彦次郎に語つたような家庭崩壊の悲惨な体験があった。この背負いきれないような重い現実が梅安のトラウマとなったことは否めない。

梅安がはじめて殺人を犯したのも女性不信が原因であった。梅安は藤枝を訪れた京の鍼医津山悦堂に崩壊家庭の現実から救済され、鍼医として育成される。悦堂の没後は鍼医として暮らしていた梅安であったが、「津山邸の近くに住んでいた井上半十郎という浪人者の妻女の軽い病気を治療しているうち、その妻女にささいなこまれ、密通を重ねるようになって」（「梅安最合傘」）という過失があったのである。やがてその不倫関係は井上の知るところとなり、妻女はその追及にたえかね、逆に梅安に誘惑されたと告白してしまったのである。女の嘘を知つた梅安は針を使ってその女を殺してしまったのである。その女が「おふくろや、妹そつくりの……いや、顔のことではねえ。やることなすことがそつくりの……いや、顔のことではねえ。やることなすことがそつくりの……

りの女」(「おんなごろし」) だったという理由からである。法的には許されざる行為であるが、それが梅安の私的倫理だったのである。シリーズ冒頭の仕掛けが悪女と化した妹おみの殺しであったことも象徴的である。

鍼医は体制内の認知された職業であるが、仕掛人は体制外の職業である。しかし、アウトローの仕掛人にもルールがある。仕掛け依頼の「起り」から仲介を依頼された「蔓」の求めに応じ、肅々と仕掛けを実行するのである。事前に半金、事後に半金の仕掛け料を受け取る仕組みになっており、前金を受け取ってからの中止は許されない。また、あくまでも「蔓」を信頼し、「起り」の名を聞くことも許されない。もちろん、梅安もこのルールは承知しており、常には世のため人のためにならぬ極悪人という「蔓」の言を信じ仕掛けを行う。しかし、時に梅安はルールを逸脱した仕掛けを行うこともある。梅安は金のためにだけ人を殺す仕掛人ではない。梅安は音羽の半右衛門から仲介された仕掛けの直後、再び要請された仕掛けを拒絶したことがある。仕掛人は前金を受領せず、仕掛けの内容について聞かなければ、その仕掛けを拒絶することは違反ではないからであった。しかし、息子の嫁を殺害した敵に重傷を負わされた松永たかという老女の悲願を成就させるため、梅安はその敵を殺しているのである(「梅安仕掛針」)。たまたま、この仕掛けは半右衛門が敵の家から依頼された仕掛けと同一であったという偶然性が存在したのであるが、「いつ、どんな時代にも、ひとの世界は善と悪とが紙一重なのだよ(中略) 善人を救うがために、私たちは金をもらって悪党どもを殺す。仕掛人がすることは悪も悪。もつともひどい悪だ。その悪が悪を殺して善を活かす。万事がそうだとはいえぬが、そうした場合もないではない」(「梅安針供養」という梅安の私的倫理感から生じた仕掛けなのである。梅安の仕掛け、それは本人や彦次郎の詳細な事前調査の結果、その仕掛け

の対象者が梅安の倫理感に違背する非人間的な存在である場合、梅安や梅安の守るべき人間の生命に脅威を与えたり、危害を加えたりした場合に限られているのである。梅安はおのれの命を狙い、一度は患者に化けて襲撃(「梅安乱れ雲」)、再度、老婆に化けて襲撃(「梅安影法師」)した、おそらくは仕掛人としての最大のライバルであったにちがいない鶴ノ森の伊三蔵を、得意の仕掛針で刺殺している。また、かつては蔓として信頼していた白子の菊右衛門も、小杉十五郎庇護の約定を破り、おのれに危害を及ぼす者と断定、隠れ家を急襲、仁義なき争闘の末に刺殺している(「梅安乱れ雲」)。しかし、無差別に血を流さないのが梅安のポリシーである。

梅安が無血の仕掛けを行う珠玉の短編がある。かつて梅安が悦堂門下の鍼医をしていたころ、嵯峨野で捨て子をしたおたかという女と再会する作品「殺気」である。おたかは梅安の母や妹にも似た悪女であった。しかし、それから十五年後、江戸で再会したとき、おたかは笹屋の後妻となり、幼い養女を溺愛する女になっていた。梅安は憎悪や殺意を抱きつつ、目黒不動堂の惣門の出口ですれ違う瞬時、おたかの襟に縫い針で紙片を差し込むのである。その紙片には「十五年前、京の、さが野へ捨てた我子を忘れるな。忘れたるときは、いつにても、そのいのちをもらいうける」(「殺気」と書かれていたという作品である。恐ろしいタイトルとは異なり、シリーズ二十編中、この作品だけは殺人が行われていない。梅安の人間性の覚醒を感じさせる作品である。また、この作品の舞台となった目黒不動堂の境内には「鬼子母神」を祀る堂宇があることに注目すべきである。鬼子母神は仏教説話の中の神である。鬼子母神は他人の子を無慈悲に奪い食した。そこで仏が彼女の多くの子の中から最愛の末子を隠して戒めた。それ以後は改心し、仏法の護法神となったという。これは女性の深層に潜む善悪両義性のシンボルでもあり、ユング

心理学でいう太母にも似た存在ともいえるのではないだろうか。梅安はおたかの中に太母の影を見てしまったのではなからうか<sup>③</sup>。

いかに梅安に人間性を回復する瞬間があったとしても、梅安は仕掛人の宿命から逃れることはできない。所詮、梅安は殺し屋やの横顔を持つ男にすぎないのである。しかし、それでは何故、梅安は裏社会という異常な世界に生きながら、その人間性を完全に喪失してしまわないのであろうか。それは梅安が異常な世界とバランスをとることのできる日常世界を保有しているからにほかならない。梅安には社会的に認知された正業があり、明日をも知れぬ人生を共有する女や友がいるからである。

梅安の正業は鍼医である。中国伝来の鍼治療は日本で独自の進化を遂げる。すでに奈良時代の律令制にも「針博士」なる官職名が存在したという。ことに江戸時代、將軍徳川綱吉の信頼も厚かったという検校杉山和一による管鍼法の開発は今日の鍼治療の原点となっている<sup>④</sup>。この治療技術は和一が開校した研修施設「杉山流鍼治療導引稽古所」を通して各地に普及し、梅安の生きた寛政年間には鍼治療の主流となっていたと見られる。梅安は和一のように盲人ではないが、その技術は「鍼医としての腕は相当なもの（中略）どこか患者に好まれる性格」（「おんなごろし」）を持つっており、貧しき者には治療費を要求しない。多くの患者たちからも信頼され、梅安自身も鍼医としての人生に生き甲斐を感じているようにも描かれている。

ただ、市井の良医である梅安が治療道具である針を凶器として使用することの意味には疑問が残る。仕掛けの凶器としては他に「梅安・彦次郎が吹きつけた吹矢の、鋭い円錐形の矢が、二人の浪人眼と喉へ喰いこんだのだ」（「秋風二人旅」）のような吹き矢、「間髪を入れずに短刀を引きぬいた梅安と彦次郎が浪人どもへ飛びつき、片手に口をふさぎ、片手の刃を逆手にくいと心ノ臓へ突き刺した」（「秋風二人旅」）のような短刀、「あ

いつらが平七へ出かけた隙に、こっちがそつと、水桶の中へ毒薬を入れておいたのも知らねえで、野郎ども、おもしろいほどに水をのみゃあがった」（「秋風二人旅」）のような毒薬などを使用している例もあるが、大半の仕掛けでは針を使用している。いかにそれが殺し専用の特殊な三寸余の仕掛針であるといえども、それは治療道具の延長線上にあるものである。これは適例ではないかも知れないが、外科医がメスを凶器として使用するようなものであり、その意味には理解しがたいものがある。梅安には他の凶器を手にする可能性もあり得たはずである。しかし、それにも関わらず、作者は意図的に神の手に悪魔の針を握らせているのである。そこにある作者の意図は何であろうか。それは作者が近代文明の持つ功罪を表現したかったからではないだろうか。近代文明が産出した機器には人類の利器という側面と社会の凶器という両側面が存在するということを表現したかったからではないであろうか。梅安の場合も治療の鍼は救命の器具であり、仕掛け針は殺人の道具である。

なお、周知のごとく、昭和四十二年（一九六七）公開の森一生監督の大映映画「ある殺し屋」にも針を使う殺し屋が登場する。それは小料理屋の主人であり、凄腕の殺し屋でもある塩沢（市川雷蔵）という男である。針による殺人の場面は塩沢が組織暴力団の大和田（松下達夫）という組長を殺す場面である。芸人に変装し、パーティー会場に潜入、余興開催中、塩沢が大和田の背後にひそかに接近、瞬時にその首筋を刺すというものである。しかし、この映画の原作は藤原審爾の短編小説「前夜<sup>⑤</sup>」であるが、そこでは塩沢は電気屋の主人であり、組長を消す凶器については書かれていない。凶器としての針の使用は増村保造、石松愛弘のシナリオ作成過程での着想であろう。映画で使用された凶器が梅安の仕掛針に影響を与えたか否かについては確証がない。ただ、映画の公開が小説の発表に先立つこと、池波が無類の映画好きであったこと、二人の主人公が

表の正業と裏の殺し屋という二つの横顔を持っていることを考えれば、無関係であったとはいいたい。

鍼医としての日常が梅安に精神的安定をもたらすように、一人の女の存在が梅安の心に癒しをもたらす。浅草の橋場にある料亭の座敷女おもんという女である。梅安と同年齢のおもんは夫と死別し、芳太郎という九歳の子を大工の父親に預け、料亭井筒で働いている。おもんは「よくはたらくが、無口で、どちらかといえば陰気な女」(「殺しの四人」)である。梅安とは愛人関係にあり、情熱的な側面も持っている。しかし、控えめな女であり、過剰な情愛や金銭を要求することもしない、他人の生活や心に干渉することもしない女である。梅安の母や妹の対極に位置する女である。そこに梅安は惹かれていく。おもんと過ごす束の間の日常空間、それは仕掛人として異常な時と空間を生きざるをえない梅安の解放される至福の場である。しかし、仕掛人は孤独である。至福の時は永続しない。未完の最終編にはおもんと別離を予感させる場面がある。白子屋の残党との最終決着を覚悟した梅安が井筒を訪れる場面である。すでもおもんは井筒の女主人となり、その経営を引き継いでいたが、留守であった。そこで梅安は前の主人の与助に金二百両を預け、江戸を離れることを告げる。行き先を尋ねる与助に「それが、ちよいと遠国へ、ね。さよう、今度は江戸へもどれぬかも知れぬ。おもんに、そうつたえてください。そうすれば、わかるはずです」(「梅安冬時雨」)と伝言して立ち去るのである。

梅安が信頼を寄せる男はきわめて少ない。元締の中ではもっとも濃密な信頼関係にあると思われるのは音羽の半右衛門であるが、梅安は「いまのところ、私は音羽の元締の敵ではないのだから」(「梅安乱れ雲」)と全面的に信頼しているわけではない。梅安はすべての人間に対して警戒心を解くことがないように見える。しかし、その梅安が警戒心を解き、

心を許す数少ない友もいる。彦次郎と十五郎の二人である。二人と過ごす時間は、おもんと過ごす時間とは異なるが、梅安の孤独な人生に慰藉を与えてくれる貴重な時間である。

## (二) 彦次郎の場合

彦次郎は梅安と同業の仕掛人である。「彦次郎」というネーミングは作者の知人の編集者の名に由来するといわれている。彦次郎は「おんなころし」では「五十をこえて見えるが、たしかな年齢を梅安も知ってはいない。梅安よりも年長であることだけはたしか」と書かれているが、「殺しの四人」では「殺し屋としての経歴は、梅安より十年は古い、たしか、四十を三つ四つはこえているだろう」と書かれている中年男である。表向きは楊子づくりを生業としている。彦次郎にも「私の生いたちと、よく似ているじゃあないか」と梅安に思わせる過去がある。彦次郎は下総松戸の水飲み百所の家生まれだが、父親は「彼が六歳のときに病死してしまい、その後、母親が別の男を家へ引き入れた」(「秋風二人旅」)のである。十歳のとき、居心地の悪い家を出る。二十一歳の春、武蔵の国馬込村に安住の地を見出す。万福寺という寺の下男となったのである。やがて同村の百姓の娘おひろと夫婦になり、女子にも恵まれる。「幸福というものを、おれは、はじめて見た気がした」(同前)と彦次郎は回想している。しかし、そのような幸福も永続することはなかった。無頼の浪人者二人におひろが蹂躪されてしまったのである。それを気にしたおひろは幼子を道連れに自らの命を絶つてしまうという悲劇が彦次郎に追い打ちをかける。それが彦次郎を仕掛人の道へ追い込んだ動機である。彦次郎と梅安は負の過去を共有する絆で結ばれている。

彦次郎は仕掛人シリーズ前の短編「梅雨の湯豆腐」<sup>⑧</sup>の主人公としてす

でに登場している。その中に蠟燭問屋の後妻お照を暗殺する場面がある。お照はかつて彦次郎も加わっていた盗賊団の首領孫八の娘お吉であった。暗黒街の顔役染川の仙蔵から頼まれ、彦次郎はお吉を暗殺してしまう。その凶器は仕掛人シリーズ内で多用される吹き矢ではない。作中に「彦次郎がちからをこめて突きこんだ「殺し針」は、お吉の帯の内がわから、ふかぶかと鳩尾へ減り込んでいたのである」とあるように針である。この殺しの対象者の前名が「お吉」であり、梅安が殺した妹の前名も「お吉」であることは奇妙な一致である。彦次郎と梅安の深いつながりを暗示しているといえるのではなからうか。なお、この作品の彦次郎は彦次郎を叔父孫八の敵と狙う浮葉の為吉のために殺されてしまうのである。

「梅雨の湯豆腐」の中で死んだ彦次郎は仕掛人シリーズの中で再生する。再生した彦次郎はシリーズの中で欠くことのできない登場人物である。しかし、主役の仕掛人として出番は梅安に比べて少ない。殺しの対象者を得意の吹き矢で射殺したと思われるのは、梅安を妻の敵と誤解してつけ狙っていた井上半十郎（「殺しの四人」、音羽の半右衛門の縄張りを狙った大井の駒藏の二人を数えるくらいである。ほとんどの仕掛人は梅安の援護的役割に回っている。梅安が狙う主敵ではなく、その他の敵を不意に狙撃し、敵に致命傷を与えるところまではいかないが、敵の戦意を喪失させ、梅安の仕掛けを援護しているのである。また、彦次郎は「まあ、ちよいと探って来ましようよ」（「梅安迷い箸」と梅安のための情報収集の役割も担っている。情報収集も、不信渦巻く裏社会の中で、正当な理由による仕掛けを遂行するためには不可欠の役割である。しかしながら、作中における彦次郎の存在意味は仕掛人としての存在意味ではなく、むしろ、梅安の精神的支柱としての存在意味を重視すべきであろう。その意味において彦次郎の立場は梅安の脇役というよりは相棒というものがふさわしい存在であり、それも仕掛人の相棒というよりは人生の

相棒と呼ぶべき存在である。通常は仕掛けの相談役的役割に徹している彦次郎であり、ただ聞き上手の相棒という存在のようにも見えるが、仕掛け前後の梅安との対話の場における人間観や死生観についての発言は対等の立場で発言している。しかし、どちらかといえば損な役回りであるが、それにも関わらず、彦次郎はその立ち位置に満足しているように見える。それは梅安の仕掛人としての魅力、人間としての魅力のなせる業であろう。たとえ年下であっても、彦次郎は人間や人生を対等に語りうる心の友としての梅安を敬愛しているのである。彦次郎にとっても梅安は欠くべからざる人間なのだ。彦次郎と梅安の関係、それは「二人は、たがいに、こころをゆるし合っている」（同前）関係なのである。放置すれば仕掛人としての非人間的な深淵に沈む恐れのあるのが彦次郎の人生である。その人間性をかろうじて支えているのは梅安との交流だけである。何しろ「梅安さんのためなら、おれのいのちなど、すこしも惜しくはねえ」（「後は知らない」と思っている彦次郎である。梅安と二人、伊勢詣での旅に出たときも、その旅路は必ずしも安全な物見遊山の旅ではなかったが、彦次郎は「こいつはまさに、お伊勢さま御利益があつて、間もなく、この世をおさらばするだろうこのおれに、久しぶりで、いい夢を見せておくんなすつたのだろうよ」（「秋風二人旅」と満足しているのである。

しかし、小杉十五郎との関係は梅安との関係と異なるものがある。梅安にとつての十五郎は見捨てることのできぬ弟のような存在であるが、彦次郎にとつての十五郎はそうではない。彦次郎も十五郎に親近感を持って確かである。しかし、「けれどねえ、梅安さん。小杉さんは、われから身を隠しなすつたのだ。それを、なにも、こつちが深追いすることもないとおもつてね（中略）もう、小杉さんには近づかねえほうがいいのではないか」（「梅安流れ星」とやや距離を置いた存在である。

彦次郎の正業に対する思い入れも梅安とは異なるものがある。梅安は正業の鍼医に生き甲斐を感じている。しかし、彦次郎は必ずしもそうではない。「浅草も外れの塩入土手に近い一軒家で楊子づくりを表向きの稼業」(同前)にしており、彦次郎がつくる楊子は浅草寺の参道にある卯の木屋という楊子店には「なくてはならぬ」(同前)ものといわれるほど高く評価されている。にも関わらず、彦次郎がそれに生き甲斐を感じているようには見えない。

また、多額の仕掛け料を得ているにも関わらず、特定の享楽の対象や場を持つていとも思われない。梅安にとってのおもんのような女がいるわけではない。まれに遊里や賭場に出入りすることもあるが、それは一時的なストレスの解消に役立つ行為でしかない。

つまり、妻子を失い、仕掛人として今日のみを生きる彦次郎に生き甲斐はないのである。彦次郎は「おれは、もう、間もなく死ぬような気がしてならぬえ」(「殺しの四人」と死の予感すら梅安に語っているほどである。ただし、酒と食物だけはささやかな生き甲斐のようにも見える。シリーズ各編には梅安との飲食の場面が多出する。料亭での飲食のシーンもあるが、大半は彦次郎や梅安の男料理を肴の飲食シーンである。梅安の場合には患者差し入れの魚や野菜を調理した美食もあるが、彦次郎の場合は豆腐料理が多いようである。しかし、たとえそれが粗食の宴であったとしても、それは生と死の狭間の日々を生きる仕掛人彦次郎の最後の晩餐なのである。

### (二二) 小杉十五郎の場合

小杉十五郎は浪人である。浪人は幕藩体制のヒエラルヒーから疎外された存在である。しかし、作中に描かれた十五郎の人物像には浪人ゆえ

の暗い陰影のようなものがない。むしろ、純粹で明朗な人物として描かれている。十五郎は「おれの死んだ親父どの、もと、大和・高取二万五千石、植村駿河守の家来でな、ところがこいつ、おれの父親だけあって、大変な短気者で、何か気に入らぬことがあったかして、江戸家老の頭をなぐりつけてしまい、それで、お暇が出た。おれが七つときだったよ……それからずつと、こうやって、江戸にこびりついているのだよ」(「梅安蟻地獄」とその出自を語っているが、その家庭が不幸であったとは語っていない。梅安や彦次郎のように、その母親にネグレクトされたとも語っていない。父子二代にわたる浪人であり、貧困生活は骨身にしみていると思われるが、権力に対する上昇志向は見られない。その剣の腕をもつてすれば仕官も成就できたであろうが、その願望すら持ち合わせていないように見える。封建体制の単なる脱落者という存在ではない。むしろ、封建体制とは無縁に生きる孤高の剣客のように思われる。

十五郎が梅安や彦次郎と関わりを持つようになったのは運命的な邂逅があったからである。十五郎が千住宿の飯盛女お仲の「両親の敵をとつて下さいまし」(同前)という末期の願いを聞き届け、その敵山崎宗伯を討つことになった時、梅安と彦次郎も元締札掛の吉兵衛の依頼を受け、宗伯の兄伊豆屋長兵衛を仕掛けることになったのである。この偶然が十五郎の仕掛人としての出発点にもなる。

梅安、彦次郎、十五郎の三人のうち、十五郎はもともと仕掛人らしくない仕掛人として描かれている。その理由は貧困ではあっても不幸ではなかったらしい家庭環境や生い立ち、その関与した争闘が専守防衛的なものであったり、梅安の援護的役割であったりしたからであろう。十五郎は「年のころは三十五、六。痩せて小柄な、まるで少年のような躰つきの、それでいて、いかにも元氣そうな、眼の大きい人で、垢じみていな

い着ながし姿で、刀は大きいのを一本、落しざし」(同前)にしている浪人である。十五郎は「浅草・元鳥越に「奥山念流」の道場を構えている牛堀九万之助のもとで、老師の牛堀を助け、門人たちへ稽古をつけてやり、牛堀から報酬を得ている」(同前)剣客であった。しかし、その十五郎を不運が襲う。「この男のほかには、自分の跡を継がせる者は見当たりませぬ。たとえ、いったんは、道場が寂れようとも、小杉十五郎は、おれのちからをもつて、奥山念流の剣の道を正しく後世につたえ残すでありますよう」(「梅安初時雨」という遺言を残し、九万之助が急死してしまうのである。道場の後継問題に不満を抱く名門旗本の子弟三人に襲撃され、十五郎は二人を斬ってしまうという事件に巻き込まれてしまうのである。本来、実力主義であるべき剣術の世界、そこにも体面重視の封建主義が存在したことは十五郎の不運であった。逃亡者となって東海道を上る十五郎を、遺族の旗本一門が追跡するが、梅安や彦次郎の護衛もあり、追跡者たちを倒した十五郎は大阪に逃れる。

しかし、大阪到着は事の終わりではなかった。むしろ、新たな事の始まりであった。十五郎の身柄は「わしがあずかるう。決してこの道へは入れぬゆえ、梅安さん、安心しなされ」(「梅安初時雨」と梅安旧知の大坂の元締白子屋菊右衛門が請け合う。この道は仕掛人の道を指し、菊右衛門の言葉にも「信じるに足るもの」(同前)があった。梅安も「一年たてば、江戸へもどれるようになります」(同前)と約する。しかし、この約定は守られなかった。白子屋は十五郎を仕掛人として使い、十五郎も「なつかしい江戸」(「梅安流れ星」)へ舞いもどつて来てしまったのである。これが梅安と白子屋対立の火種ともなるのである。

梅安は十五郎に足を洗わせようとするが、「梅安どのが、おれに、足を洗わせようとしてくれている気持ちはいれしいが……なれど、足を洗ったところでどうなるう。真面に生きられようはずもないではな

いか」(「梅安針供養」という十五郎の虚無的な思いと「梅安は、どうしても小杉十五郎さんを、わしの手へもどさぬというのかい」(同前)という白子屋の執念がそれを妨げる。

梅安と彦次郎の援護を受けながら、十五郎は旗本一門の執拗な追撃を防ぎ、白子屋と対決するために旅立とうとするが、梅安に止められる。

十五郎単独で立ち向かえる敵ではなかったからである。やがて「梅安乱れ雲」の中では白子屋は音羽の半右衛門におびき出される。江戸での縄張り拡大を恐れた半右衛門に先手をうたれたのである。白子屋下向の報を彦次郎から聞き、梅安がその隠れ家山城屋を単身急襲し、白子屋を殺したとき、十五郎と彦次郎も駆けつける。十五郎は用心棒を斬り、梅安の逃走を助ける。この事件以後、十五郎は梅安と彦次郎との絆をますます深めることになる。

梅安、彦次郎、十五郎、この三人の仕掛人が絆を深めることになった原因、そこにはその生い立ちの共通点があげられる。理由は異なるが、いずれもその家族を喪失しているのである。その喪失感、孤独が三人の殺し屋を接近させたのである。理のない殺人はしないという共通点もあげることができる。旗本一門との死闘も十五郎に理はあり、それは専守防衛のための戦いに限定されているのである。三人の仕掛人は擬似家族のようにも思われる。行動力のある次弟が梅安、冷静な賢兄が彦次郎、才能はあるが、ややその行動に不安があり、放任することのできない末弟が十五郎という関係である。しかし、その家族は心優しき殺し屋たちの幻想の家族である。

その濃密な関係は梅安に三人で同居する家の建築を構想させる。梅安は目黒に宅地を求め、十五郎に絵図面を描かせ、普請を始める。梅安は「おもしろい、おもしろいよ。自分の家を建てるなぞということが、これほど、おもしろいものだとは知らなかった」(「梅安冬時雨」と建築に熱



申し、彦次郎も「これは、鍼治療の家だが、仕掛人の家でもある」（同前）とそれを絶賛している。しかし、梅安は「家を建てることで、おれは少し、浮かれているのではないか」（同前）と不安も持っている。作品が未完のまま断絶しているため、この建築も普請中のまま中断している。しかし、仮に作品が継続し、この理想の家が完成したとしても、それは三人の安住の地ではないであろう。なぜなら、白子屋の残党や旗本一門が根絶されたわけではなく、三人は果てしない戦いの渦中から逃れることはできないからである。防御や脱出の仕掛けをもち、いかに堅固な家を建てたとしても、それは砂上の楼閣のように危うく脆い存在にすぎないであろう。孤独な横顔を持ち、仕掛けの闇に生きる、仕掛人と呼ばれる三人、その殺し屋たちには安住の地も明日という日もないのである。

#### （四）半右衛門の場合

音羽の半右衛門は江戸の暗黒街に君臨する顔役である。半右衛門は「一寸法師に黴が生えたよう」（闇の大川橋）な小男であり、「老けて見えるが（中略）まだ、五十前」（同前）の男であるが、三つの顔を持つ男でもある。料理茶屋の主人、香具師の元締、仕掛けの蔓の三つの顔である。第一の顔は「小石川の音羽九丁目で「吉田屋」という料理茶屋の主人におさまっている」（同前）男の顔である。こちらの顔は風采のあがらぬ料理屋の主人というやや戯画化された顔であるが、体制内公認の顔である。しかし、こちらの経営は「六尺にちかいで、つぶりとした大女」（同前）のおくらという女房にまかせている。

第二の顔は「小石川から雑司ヶ谷一带を縄張りに行っている香具師の元締であって、江戸のこの世界で、彼の名を知らぬものはない」（同前）といわれているような男の顔である。こちらは体制内公認の顔とはいえない

いが、香具師の利権争いを防ぐための黙認の顔である。

第三の顔は仕掛けの仲介人である蔓としての顔である。こちらの顔は闇の支配者の顔であり、体制内非公認の顔である。しかし、同業者の札掛の吉兵衛が「音羽の半右衛門どんならば、おうけなすつても大丈夫でございますよ。あのお人は、仕掛けのことについていちゃあ、それはもう念を入れなさるお人でございます。よくよく納得がゆかねえかぎり、仕掛けは引きうけません。ですからね、あのお人のもつて来た仕掛けは、私同様、間ちがいなく、この世に生きていならねえ奴への仕掛けでございます」（同前）と梅安に保証するような男の顔を持っている。シリーズに登場する他の元締たちからも一目置かれている存在の男である。

しかし、シリーズ前の作品に登場する半右衛門は別の顔を持つ男でもあった。「強請」という作品には「宇之吉が、内田勘兵衛と、もう一人の浪人に殺させたのは、先代の半右衛門であった」と宇之吉と称した若き日の半右衛門の前科が明らかにされている。半右衛門の弱みにつけこみ、毒薬の融通を迫る勘兵衛を、もう一人の浪人に消させてもいる。さらに毒薬入手のルートを確保するため、半右衛門は「あなたが十七、八年も前に、お茶の水へ屋敷をかまえ、三年もたたねえうちに、あれだけの評判をとったのも、元はといえれば金だ。金があったからお前さん、売り出せたのさ。むかしのお前さんに、金になる仕事をおさせ申したのは、このわしですよ。こいつはもう忘れようといつても、たがいに忘れられねえことさ。え、そうでございましょう」と町医者秋山高庵を脅迫する半右衛門像も描かれている。「顔」という作品には半金を受け取りながらも気乗りがせず、殺しの実行を躊躇している浪人木村十蔵の二歳の長女お菊を誘拐、「しばらく、子どもさんをあずかる。さわりではいけない。さわぐと、子どもさんのいのちにかかわる。なにごと旦那が知っていなさることゆえ、案ずることはない。この手がみを、だんなに見せれば、

万事うまくはこぶゆえ、くれぐれも案じなざるな」という脅迫状を十蔵の妻お沢に送り、その実行を強要する半右衛門も登場している。

ただし、「殺しの掟<sup>⑩</sup>」という作品には「事と次第によつては引きうけましようが……わしはね、この世の中に生きていても仕方がねえ人、生かしておいては世のため人のためにならねえ人、それでなくては殺しませぬよ」という半右衛門なりの殺しのルールが出てくる。それはシリーズの作品群中に見られる半右衛門の殺しのルールと同じものである。

半右衛門はシリーズ中の「闇の大川橋」という作品に初登場、大身旗本安部父子の仕掛けから梅安との関わり生じる。半右衛門は闇のシンジケートの巨魁であるが、ルールに反した殺しはしないのがモットーである。世のため人のためにならぬ悪逆非道の者を除き、仕掛けを仲介することをしないのを原則としている。元締としての縄張りの維持も自己防衛が目的であり、利権追求が目的ではない。半右衛門はその縄張りと命を狙った大井の駒蔵を亡きものとした後にも「わしは、大井の駒蔵の縄張りをどうしようなどと毛すじほどもおもつてはおりませぬよ。駒蔵の片腕といわれている山室の菊治郎<sup>きくじろう</sup>という男が、こいつがなかなかしつかりした男なので、これがまあ、駒蔵の跡目をつぐことになりましようから、そうなればもう、菊治郎を助けてやりこそすれ、縄張りを荒らすようなまねは……」(「梅安鯉飯」)と梅安に語っているくらいである。しかし、「梅安乱れ雲」の中では暗黒街の首領の横顔を垣間見せている。白子屋菊右衛門の愛人お八重を誘拐、吉田屋の地下蔵に監禁、江戸進出と梅安の命を狙う菊右衛門をおびき出し、梅安に仕掛けさせているのである。

この半右衛門とは対照的に描かれているのが白子屋菊右衛門である。しかし、半右衛門が正義の象徴であり、菊右衛門が悪徳の象徴であるという図式は成立しない。菊右衛門は確かに「大坂の道頓堀・相生橋北

殺し屋たちのプロフィール

詰の、白子屋という大きな料亭の主人である菊右衛門だが、蔭へまわると、諸方の盛り場を牛耳<sup>ぎゅうじ</sup>っている香具師の元締の一人で、大坂の暗黒街における勢力の大きさは、はかりしれぬもの(「秋風二人旅」)を持つ存在ではあった。しかし、菊右衛門は初登場時から悪役として描写されてはいないのである。仕掛けの蔓としては「この世の中に生かしておいてはためにならぬやつどもを殺すのでなければ、引きうけぬ」(同前)と伝聞された元締であった。菊右衛門の仲介で公家の家臣を仕掛けたときも、菊右衛門が「いつまでもわしの手もとにいてくれぬやるか、悪いようにはせぬ」(同前)と言ってくれたことを梅安は長く忘れていない。つまり、シリーズ前半の菊右衛門は仁義や情を心得た顔役として描かれているのである。梅安との信頼関係が破綻する原因となった十五郎の処遇をめぐる問題にしても、菊右衛門にのみ責めがあると言いつけることはできない。確かに仕掛けを世話したのは菊右衛門であり、梅安との約束に反したという意味での責めはある。しかし、居候の倦怠の日々を持って余した十五郎の意志が仕掛けの誘惑に負けたことも確かであり、十五郎の側にも責めはある。十五郎には仕掛けを拒否する選択もあり得たはずだからである。

しかし、シリーズ後半の菊右衛門は悪徳の権化のように描かれている。江戸における勢力拡大の野望、おのれの手を離れた梅安に対する一方通行の憎悪、それらはストーリーの進展とともに次第にエスカレートしている。「むかしの元締は、あのようなまねをしなかったものだが」(「梅安乱れ雲」)と梅安も驚き嘆いているほどである。しかし、その野望や憎悪が頂点に達しようとしたとき、それを察知した半右衛門や梅安の策にはまり、倒されてしまうのである。

半右衛門や菊右衛門の変貌は池波正太郎の人間観とも関わりがある。池波の人間観は善悪対立論ではない。むしろ、善悪並立論である。また、

善人悪人区別論ではない。善人悪人変貌論である。その典型的な作品が時代小説『鬼平犯科帳』シリーズにある。その作中で火盜改めの頭である長谷川平蔵が密偵の小房の糸八に凶賊血頭の丹兵衛の人物像について問いかける。その問いかけに対して糸八は「本物の丹兵衛なら、そんな、むごたらしいまねは、お日さまが西から出て来てもいたすもんじゃございませぬ」〔血頭の丹兵衛<sup>②</sup>〕と答える。しかし、糸八が潜入捜査の過程で丹兵衛に会ったとき、丹兵衛は「いまのおれは、むかしの丹兵衛じゃねえ。このせわしねえ世の中に、むかしのようになびりしたお盗<sup>どろ</sup>がしていられるものか」(同前)と居直るのである。それを聞いた糸八はその理想と現実の落差に絶望してしまうのである。現在、たとえ一人の人間が善人であったとしても、その人間は永久に善人のままではない。現在、たとえ一人の人間が悪人だとしても、その人間は永久に悪人のままではない。それが池波正太郎の人間観にちがいない。

### おわりに

時代小説というものには時空を超えて存在する仮構の世界や架空の人物が描かれることがある。

そのような時代小説における時代設定は遠くて近い時代が理想である。はるかに遠い時代、あまりにも直近の時代では作品のリアリティーが失われてしまうからである。時代小説作家池波正太郎、その理想の時代は江戸時代である。

時代小説『仕掛人・藤枝梅安』シリーズの時代設定も江戸時代の寛政期である。その前政権の時代、その実力者であった田沼意次の重商主義政策は部分的には市場経済に活性化をもたらしたが、さまざまの課題も残した。新たに老中に就任した松平定信はその課題を解決すべく寛政の

改革を実施した。しかし、その経済抑制策はかえって経済を沈滞させ、都市も農村も疲弊するという課題を残した。疲弊した農村から流入した無宿人が江戸の町にあふれ、そのために犯罪も増加する。その治安維持のため、『鬼平犯科帳』の主人公のモデルとなった先手弓頭火付盜賊改役の長谷川平蔵が石川島に加役方人足寄場という更生施設設置を提案、それを定信に提言せざるをえないような時代状況をもたらしたのである。結局、定信の政治改革は経済を再浮上させることはできなかった。民衆の不平不満は「白河の清きに魚の住みかねてもとの濁りの田沼こひしき」という狂歌を流布させ、やがて定信は老中職を退任せざるをえなくなったのである。その改革路線を継承した松平信明や戸田氏教も、田沼政治の残した課題を解決することはできなかった。

仕掛人シリーズの書き始められた昭和四十七年(一九七二)は昭和時代の高度成長期(一九五五―一九七三)の末期であった。世界第二位の経済大国の幻想に酔った時期でもある。しかし、高度成長はさまざまな矛盾や課題をも残した。工業生産の飛躍的向上は農村人口の都市への流入、公害問題などを発生させた。護送船団方式の経済成長は官民癒着のロッキード事件などの犯罪をも発生させた。やがて十八年続いた高度成長期は終焉を迎えることになるのである。

もちろん、江戸時代の寛政期と昭和時代の高度成長末期ではその時代状況は異なる。しかし、経済成長終焉期のさまざまな難問を抱えているという共通点も存在するのである。寛政期にも高度成長末期にも時代閉塞の現状は存在したのである。作者には寛政期という時代は遠くて近い過去であった。過去の時代というものは現代という時代と無縁ではない。過去の時代は現代を映す鏡でもある。仕掛人シリーズの鏡は寛政期であり、池波正太郎はその鏡に現代的課題を巧妙に映し出して見せたのである。

時代小説には歴史上の人物が登場することが多い。しかし、仕掛人シリーズの登場人物は架空の人物である。『鬼平犯科帳』シリーズの主人公である長谷川平蔵は歴史上の人物である。『剣客商売』に秋山小兵衛と大治郎父子の庇護者として登場する田沼意次も歴史上の人物である。しかし、仕掛人シリーズの梅安、彦次郎、十五郎、半右衛門、その他の仕掛人、元締のすべては架空の人物である。しかし、そこには作者池波の仕掛けが隠されていると見るべきであろう。舞台としての江戸の暗黒街、そこはバーチャルな空間である。そこに歴史上の人物を暗躍させることは不自然である。そこには歴史の制約をうけず、自由に暗躍できる架空の人物が必要だったのである。

しかし、その架空のヒーロー、仕掛人たちの人間関係は非情なものとして描かれている。いかにその主人公の人間性に魅了された関係であったとしても、鬼平と同心や密偵たちとの人間関係は封建体制下の従属的關係であり、小兵衛とその家族、小兵衛を慕う人々との人間関係は家父長制的関係である。しかし、仕掛人たちの人間関係はそのどちらでもない。仕掛人たちの人間関係は殺しというビジネスで結ばれた関係にすぎない。昨日の敵は今日の友であり、今日の友は明日の敵であるような関係である。永続的ではない関係である。現在のところ、梅安、彦次郎、十五郎、半右衛門の人間関係はそれらとは異なる家族主義的な関係を保っているように見える。しかし、それはいつ破綻しないとも限らない危うい関係である。その意味では仕掛人たちの関係はきわめて現代的な人間関係といえよう。現代社会ではもはや家族主義的な人間関係は失われ、ビジネスライクな人間関係が生まれつつある。そのような危うい現代社会を描くこと、そこにも作者の仕掛けがあったのではないだろうか。仕掛人シリーズでは仕掛けの描写が強く印象に残る。しかし、仕掛けは瞬時の出来事であり、その描写量もわずかである。むしろ、描写量の

多いのは仕掛人の日常を描いた部分である。仕掛人たちの正業や飲食や旅、そしてきわめて日常的な世間話を描いた部分が圧倒的に多いのである。しかし、ここにも作者の仕掛けが隠されていると見るべきであろう。たとえ正当な理由があったとしても、仕掛人たちの行うビジネスとしての殺人は異常な行為である。仕掛人の日常描写を削除すれば、その異常な行為の目撃者となった読者の深層心理にも、それは異常な追体験の残像として刻みこまれてしまう。それを解消するための方法は読者を異常な追体験から解放するしかない。その作品の鑑賞者を異常な追体験から解放した好例としては深沢七郎の小説を映画化した昭和三十三年（一九五八）公開の松竹映画『榎山節考』<sup>③</sup>がある。監督の木下恵介は全編に古典演劇の楽曲と語りの効果をちりばめ、そのラストシーンでは汽車を走らせている。そこには近世の棄老説話という深刻なテーマから観客を解放するための仕掛けがあった。木下は映像の中の残酷なストーリーがあくまでも仮構の世界の出来事であるというメッセージを強調したのである。池波正太郎の仕掛人シリーズにおける無用とも思われるほどに多い日常描写、それも読者を異常な追体験から解放するための作者の巧妙な仕掛けだったにちがいない。

### 注

- ① 昭和五十七年『小説現代』六月号
- ② 『仕掛人・藤枝梅安』の本文引用は平成十二年『完本池波正太郎大成』第十六巻による。以下同。
- ③ 拙稿「仕掛人シリーズ」の女性像―池波正太郎に時代小説―（平成十七年『解釈』一・二月号）
- ④ 丸山敏秋『鍼灸古典入門』（昭和六十二年・思文閣出版）
- ⑤ 昭和四十年『オール讀物』十一月号
- ⑥ 拙稿「池波正太郎の女性観」（平成二十一年『國文學』六月号）

- ⑦ 大村彦次郎「仕掛人・藤枝梅安二」(平成二十二年・『池波正太郎の世界  
三』・朝日新聞出版)
- ⑧ 昭和四十五年『小説現代』八月号
- ⑨ 昭和四十六年『小説新潮』七月号
- ⑩ 昭和四十六年『小説新潮』二月号

- ⑪ 昭和四十六年『小説新潮』十一月号
- ⑫ 昭和四十三年『オール讀物』三月号
- ⑬ 昭和三十一年『中央公論』十一月号

(浜松大学健康プロデュース学部特任教授)